

れ、タイヤが替えられ、走ることを認められねばならない」のだが、その「生まれ変わりに相応しい儀式」の必要性を考えているうちに、Nolan医師に導かれて面接室に入っていく。「面接官たちの眼によって魔法の糸に導かれるように」入っていく。この「魔法の糸」に操られる姿の描写には、自らの〈自由意志〉で未来に向かうという精神的強さは感じられない。退院はしても、結局、ポンコツの車のように、再び故障するだろう。電気ショックの効果が薄れれば再び〈自我分裂〉するのだろう。Sylvia Plath自身が何度も精神分裂を繰り返し、最後には自殺を選んだように。

Notes

- (1) Sylvia Plath, *The Bell Jar* (London: Faber and Faber, 1963, rpt., 1966) 以後のテキストからの引用は全てこの版により、括弧内にページ数のみを記す。
- (2) Linda K. Bundtzen, *Plath's Incarnation : Woman and the Creative Process* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1988) 130.
- (3) Caroline King Barnard, *Sylvia Plath* (Boston: Twayne Publishers, 1978) 30.
- (4) Steven Gould Axelrod, *Sylvia Plath : The Wound and the Cure of the Words* (Baltimore & London: The Johns Hopkins University Press, 1990) 120.
- (5) Barnard, 33.
- (6) Tony Tanner, *City of Words : American Fiction 1950-1970* (New York: Harper & Row, Publishers, 1971) 264.
- (7) Linda Wagner-Martin, *The Bell Jar : A Novel of the Fifties* (New York: Twayne Publishers, 1992) 78.
- (8) Wagner-Martin, 42.
- (9) Sylvia Plath, *Johnny Panic and the Bible of Dreams : Short Stories, Prose and Diary Excerpts* (Cutchogue New York: Buccaneer Books, 1952, rpt., 1979) 152-166.

jarはこれから戻る女子大に学ぶ友人たちすべてのうえにも覆いかぶさっている (251)。しかし、彼女には解放感もあり、「世界の従来 of 秩序は新しい局面に入った」(252)とも感じている。

退院のための面接を受けに出かけるとき、彼女は「圧迫するような歪みのあるベル・ジャーがいつまた落ちてくるか」(254) わからないと不安を述べる。しかし、一方で、「私は完全に自由になった」(255) とか、“I am, I am, I am.” (256) と自己の存在感を強く意識してもいる。最後に、退院のための医師の面接室に行く場面は次のように描かれる。

I had hoped, at my departure, *I would feel sure and knowledgeable about everything that lay ahead--after all, I had been 'analyzed'.* Instead, all I could see were question marks.

I kept shooting impatient glances at the closed boardroom door. My stocking seams were straight, my black shoes cracked, but polished, and *my red wool suit flamboyant as my plans.* Something old, something new....

But I wasn't getting married. There ought, I thought, to be a ritual for being born twice--patched, retreaded and approved for the road. I was trying to think of an appropriate one when Doctor Nolan appeared from nowhere and touched me on the shoulder.

'All right, Esther.'

I rose and followed her to the open door.

Pausing, for a brief breath, on the threshold, I saw the silver-haired doctor who had told me about the rivers and the Pilgrims on my first day, and the pocked, cadaverous face of Miss Huey, and eyes I thought I had recognized over white masks.

The eyes and the faces all turned themselves towards me, and guiding myself by them, as by a magical thread, I stepped into the room. (257-258) [イタリックは筆者]

彼女は、医者 of 狂気と正気の判断に疑問を抱き、死ぬほど脅えながら面接と将来を考える。退院することにはなるだろうが、彼女は将来 of すべてのことに何の知識ももたず、「見えるのはただ疑問符ばかりである」。それでも、未来への「明るい計画」があるかのように元気に面接室に進み出る。しかし、また暗い想いが心をよぎる。彼女は回想的視点から「結婚するつもりはなかった」と明るい想いを否定する。「道路を走るようになるにはパンクが修理さ

を感じ、大学教師Irwinを相手に処女を失う。病院患者として現れた幼なじみでレスビアンのJoan (Estherのdoubleである) はEstherが男性と関係したことがきっかけで自殺してしまうのに、Estherはそれとは逆に快方に向かう。回復に向かうEstherはボストンの美しい雪景色を見て、雪は欺瞞で、その下には昔の「風土 (topography)」(249) が〈原風景〉として残っていると考える。

Massachusetts would be sunk in a marble calm. I pictured the snowflakey, Grandma Moses villages, the reaches of swamp-land rattling with dried cat-tails, the ponds where frog and hornpout dreamed in a sheath of ice, and the shivering woods.

But under the deceptively clean and level slate the topography was the same, and instead of San Francisco or Europe or Mars I would be learning the old landscape, brook and hill and tree. In one way it seemed a small thing, starting, after a six months' lapse, where I had so vehemently left off. (249) [イタリックは筆者]

彼女が乗り越えるべきボストンの閉鎖的な故郷の風景はそのまま残っていることを、回想しているEstherは知っているのである。病院を訪れた母親は、過去は「悪夢」として忘れなさいというが、Estherは「死んだ赤ん坊のように、空白で止まったベル・ジャーの中に閉じ込められた人間にとっては、世界自体が悪夢である」(250) と考える。

A bad dream.

I remembered everything.

I remembered the cadavers and Doreen and the story of the fig-tree and Marco's diamond and the sailor on the Common and Doctor Gordon's wall-eyed nurse and the broken thermometers and the negro with his two kinds of beans and the twenty pounds I gained on insulin and the rock that bulged between sky and sea like a grey skull.

Maybe forgetfulness, like a kind snow, should numb and cover them.

But they were part of me. They were my landscape. (250) [イタリックは筆者]

これまでのさまざまな経験はそのうえに雪が降り積もって無感覚にしても、自分の身体の一部として、自分の〈原風景〉として厳然と残ると考える。bell

little gilt box with a mirror on one side. I also have a white plastic sun-glasses case with coloured shells and sequins and a green plastic starfish sewed on to it.

I realized we kept piling up these presents because it was as good as free advertising for the firms involved, but I couldn't be cynical. I got such a kick out of all those free gifts showering on to us. *For a long time afterwards I hid them away, but later, when I was all right again, I brought them out, and I still have them around the house. I use the lipsticks now and then, and last week I cut the plastic starfish off the sun-glasses case for the baby to play with.* (3-4) [イタリックは筆者]

この引用文を慎重に読むとき、筆者には、Estherが現在の結婚した状況に満足しているような自信に満ちた雰囲気は感じられない。精神分裂病からの一時的回復はあったとしても、彼女の自我の全体的統合・回復は達成されていないようである。

結論から先に言えば、筆者の読みでは作品の結末は希望の調子よりは不安感の方が強いと思われる。そして、彼女が結婚した現在から不安に満ちた過去の経験の結末を描いているということは、現在選択している結婚生活も決定的なものではなく、一時的なものであり、まだ変化する可能性が高いということを示しているのではないだろうか。つまり、作品の結末においてEstherは、Wagner-Martinが主張するように、〈新しい高い知識〉を獲得したわけではなく、ただ単に避妊具の使用と、電気ショックによる無感覚化によって、解放感を感じているだけであるといったほうがよいだろう。電気ショックによる無感覚化によって結婚を選択してはいるが、登場人物の一人Valerieのロボットミ手術(203)とは違って、電気ショックの効果は永久的なものではない。Esther自身が書いているように、彼女には「生まれ変わるためのそれに相応しい儀式」(257)、つまり〈再生の儀式〉はまだ済んではないのだから、まだ新しい生きる知恵を獲得しているわけではない。あらゆる夢を同時に保持しようと切望することは、〈自我分裂〉を引き起こすことになるのだから、現在も不安と自我分裂が続いているのだと考えた方がよいだろう。

Doctor Nolanの電気ショック治療後に、Estherは「ベル・ジャーは吊るされたまま私の頭上数フィートのところまで上がった」(227)と書き、風通しの良さを感じている。そして、かつて自殺を考えていた時の「ナイフ」(228)のことも鳥が空を飛ぶように忘れている。電気ショックは無感覚化と忘却をもたらす。そして、Nolan医師に勧められて避妊具(ペッサリー)を付け自由

て明るくはない。

Ⅳ. 終結部におけるEstherの存在状況と彼女の「現在」

この作品の最大の問題点は、作品の最後まで〈子育て〉を嫌い、「私は結婚するつもりはなかった」(257)と述べていたEstherが、回想して物語っている現在の時点においては、〈結婚し子供を育てている〉(3-4)という事実であろう。これは、あの〈イチジクの木の実〉に象徴的に示されていたところの「どれか一つの夢を選択すればほかのすべての夢を失う」(80) ことになるという考えを捨てて、結婚にポジティブな意味を見いだしたということであろうか。この点に関する批評はさまざまである。Steven Axelrodは「彼女の過去の葛藤についての語りは来るべき一層大きな爆発を示す」⁽⁴⁾と述べて、悲観的な見解を提示している。一方、Caroline Barnardは「小説の結末に警戒すべき調子があること」を認めながらも「Estherの回復は完璧である」⁽⁵⁾と評する。また、批評家Tony Tannerは*City of Words*において、「作品は再生の経験と新生活の希望で終わる」⁽⁶⁾と述べている。Linda Wagner-Martinは*The Bell Jar: A Novel of the Fifties*において、作品の結末を〈勝利に満ちたポジティブな終わり方〉だと考え、Estherは「誤りに満ちていた以前の考え方を捨てて新しい知識に達した」⁽⁷⁾と論じ、「電気ショックによる治療の間に非常に多くのself-understandingを得た」⁽⁸⁾と述べている。しかし、作品の結末はそれほど希望的トーンが強いのであろうか。筆者の見解はAxelrodの読みに近い。つまり、作品の最後で、Estherは「これだけ（病院で）分析されたのだから、病院を退院するときには、将来のすべてに関して確信と知識が備わると考えていたのだが、そうではなくて、私に見えるのはただ疑問符だけだった」(257)と述べているのだから、彼女が「新しい知識」に達したわけがない。確かに“Johnny Panic and the Bible of Dreams” (1958) という短編小説のなかで電気ショックは人間の感覚を麻痺させ、夢を剥奪し、社会に適合させるとSilvia Plathは書いていたが、そこで強調されていたのはそういう電気ショックの男性的・非人間的恐怖の方であった⁽⁹⁾。そしてまた、回想している現在のEstherの〈語り口〉には、無感情とぶっきらぼうな調子が強いように思われる。

I still have the make-up kit they gave me, fitted out for a person with brown eyes and brown hair: an oblong of brown mascara with a tiny brush, and a round basin of blue eye-shadow just big enough to dab the tip of your finger in, and three lipsticks ranging from red to pink, all cased in the same

Estherにとっては理想像であり、自分の将来を決める指針を提供してくれる存在である。しかし、Linda K. Bundtzenが「Estherの文学的理想の恩師でありrole modelであるJay Ceeのような母親をもつことも、実際、彼女を助けてはくれない」⁽²⁾と述べているように、彼女はさらに理想の母親像を追求する。

精神科医Doctor Nolanは、最初に登場し、電気ショック療法を試みた男性の医師Doctor Gordonとは違って、女性であり、優しく、やはり〈代理母〉としての役割を果たしている。Rosenberg夫妻の電気椅子処刑と洗脳 (brainwash) (89) を連想させる電気ショックは、彼女には恐怖であったが、Nolanはこれはやらない、やるときには前以て知らせると言ってくれる。NolanはたえずEstherの気持ちを考えてくれる母親的な人物であり、彼女に導かれてEstherは次第に回復に向かう。Caroline King BarnardはNolanの助けによって「Estherは徐々に新しいより統合された自己を確立する」⁽³⁾と論じる。Estherが「統合された自己」を最終的に確立しているとは筆者は考えないのだが、病気の快復への大きな助けとなっていることは間違いない。但し、電気ショックを受けさせるときは事前通告をせず、Estherは「ひどい裏切り」(223) だと怒る。

Doctor Nolan put her arm around me and hugged me like a mother.

'You said you'd *tell* me!' I shouted at her through the dishevelled blanket.

'But I *am* telling you,' Doctor Nolan said. 'I've come specially early to tell you, and I'm taking you over myself.'

I peered at her through swollen lids. 'Why didn't you tell me last night?'

'I only thought it would keep you awake. If I'd known...'

'You *said* you'd tell me.'

'Listen, Esther,' Doctor Nolan said. 'I'm going over with you. I'll be there the whole time, so everything will happen right, the way I promised. I'll be there when you wake up, and I'll bring you back again.'

I looked at her. She seemed very upset.

I waited a minute. Then I said, 'Promise you'll be there.' (224)

ここで、NolanがEstherの怒りに対して「非常に当惑している」ところから考えると、Nolanの優しさも医者としてのお決まりの仕事の範囲ではないかと疑われるところもないではない。しかし、ともかく、このようにEstherは代理母を求めていることは間違いない。SalingerのHolden少年が妹Pheobeを通して未来への微かな希望を見たように、Estherは二人の〈代理母〉に希望を見ている。しかし、Holdenの未来も希望が薄かったように、Estherの未来も決し

ろん女性が自立して生きるための社会背景が整ってはいない時代であるから、すべての希望を同時に所有しようとすることは〈自我分裂〉をきたすことになる。つまり、彼女は、作者Sylvia Plath同様に、自己の能力を過信し過ぎているのだ。こうして彼女は夢のひとつである有名な作家になるという希望が崩れるとき、自分の能力の限界を感じて、精神病になり、自殺を図ることになる。

Ⅲ. Estherの母と代理母

父親の死後、Estherは母親の期待に沿って優等生的な生活を送ってきているが、既に9歳のときから「結婚するつもりはなかった」(28)と言い、〈トイレの騷〉も必要でなかったほど早熟であった彼女は、母親の父の死に対する冷たい態度、真に自立する意志もなくタイプと速記（タイプと速記は男性に仕える仕事に過ぎない）を教えている母親の姿、さらにはボストンの父権的価値観を体現する母を見て、自分の自己実現には「何の助けにもならない」(40)、疎ましい存在としか映らない。母のバスローブの紐で首吊りをしようとしたり、母親の薬箱の睡眠薬で自殺を図るEstherは徹底的に母親を拒否している。自殺未遂後に病院に母が誕生日のお祝いにと持ってきたバラの花をくずかごに捨て、その顔を“a pale, reproachful moon” (250) と表現するEstherには、疎ましい存在としての母親拒否の姿勢が最後まで認められる。

つまり、Estherの母は、彼女にとって自己実現の夢のなかで決して理想の女性ではなく、女性が乗り越えるべき第一の〈壁〉なのである。そこで彼女は現実の母親に代わる〈代理母〉(mother-substitute)を求める。まず、ニューヨークの雑誌社の女性編集長Jay Ceeは美人ではないが自立した女性であり、先に触れた〈イチジクの木の実〉の未来の夢の一つである編集長Ee Geeのイメージはここからきている。

I sat quietly in my swivel chair for a few minutes and thought about Jay Cee. I tried to imagine what it would be like if I were Ee Gee, the famous editor, in an office full of potted rubber plants and African violets my secretary had to water each morning. *I wished I had a mother like Jay Cee. Then I'd know what to do.* (40) [イタリックは筆者]

母親と違って、仕事を持ち、適切なアドバイスをする颯爽とした女性は

any more. So I began to think maybe it was true that when you were married and had children it was like *being brainwashed*, and afterwards you went about numb as *a slave in some private, totalitarian state*. (89) [イタリックは筆者]

これらは全て女性の自立への足かせであり、女性の自由への夢の実現を阻むものである。もちろん、ここで使われている「洗脳」という言葉は、Rosenberg夫妻の電気椅子処刑と後に彼女が受ける電気ショック療法と繋がるものである。

では、Estherの夢とは何であるのか。彼女には、「イチジクの木」の枝にたわむ沢山の果実のように、幸せな結婚生活、詩人、大学教授、すばらしい編集者Ee Gee、ヨーロッパへの憧れなど無数の将来の夢があるが、彼女にとって、そのうちのどれか一つを選ぶことは残りすべてを失うことを意味する。

From the tip of every branch, like a fat purple fig, a wonderful future beckoned and winked. One fig was a husband and a happy home and children, and another fig was a famous poet and another fig was a brilliant professor, and another fig was Ee Gee, the amazing editor, and another fig was Europe and Africa and South America, and another fig was Constantin and Socrates and Attila and a pack of other lovers with queer names and off-beat professions, and another fig was an Olympic lady crew champion, and beyond and above these figs were many more figs I couldn't quite make out.

I saw myself sitting in the crotch of this fig-tree, starving to death, just because I couldn't make up my mind which of the figs I would choose. *I wanted each and every one of them, but choosing one meant losing all the rest, and, as I sat there, unable to decide, the figs began to wrinkle and go black, and one by one, they plopped to the ground at my feet.* (80) [イタリックは筆者]

つまり彼女にはこのようにすべての理想を同時に持ち続けたいという希望がある。結婚と子育てへの嫌悪を何度も示している（彼女には結婚や子育てへの憧れが内面にはあるのだが、女性の自立ということを考える時いつもこれを否定している）Estherが（28,123,125,234）、ここで結婚・子供も夢の一つであるとしていることは、自分の家族やWillard家と違う幸せな家庭、さらには結婚も仕事も同時に可能な家庭を夢としているということであろう。もち

Estherは、自分は万能であるという自負心が非常に強い自意識過剰の女性である。ニューヨークの雑誌社の懸賞論文コンテストに入選した全米から集まった若い女性たちとともに彼女はメトロポリスで都市生活に初めて触れている。この作品は、一人称で彼女が回想として語る物語であるが、この時の自分は「どこかがおかしかった」(2)と語る彼女は、都会生活に流されて自己を見失っていたことをはっきり認識している。彼女には都市への憧れと嫌悪という二律背反の感情があり、冷笑的にニューヨークの華やかさを見ている。都市で彼女が経験したものは、田舎者である彼女が持っていた優越感の挫折であった。

自己のアイデンティティの確立の難しさは、二人の友人Doreen（退廃的）とBetsy（保守的）に見られる二面のどちらにもコミットできない状態に表れている。彼女が偽名のElly Higginbottomをしばしば使っていることは彼女の自我分裂した不安定さを示している。ここでの、女性や男性との経験はすべて不成功に終わり、自己の〈空虚さ〉と〈消滅感〉を感じ、最後にはニューヨークのビルの上から衣服を投げ捨て、都市の汚れを捨てて浄化の儀式をおこなっている。

The wind made an effort, but failed, and a batlike shadow sank towards the roof garden of the penthouse opposite.

Piece by piece, I fed my wardrobe to the night wind, and flutteringly, like a loved one's ashes, the grey scraps were ferried off, to settle here, there, exactly where I would never know, in the dark heart of New York. (117)

ここまでに綴られるのは、それまで彼女が育てられてきた保守的価値観（性意識と女性意識に関する）とそれを打ち破ろうとする彼女の意志との葛藤である。まず〈性意識〉は、母親やWillard夫人に代表される処女性についての観念を破り、人類の「偉大な伝統の一部」(242)になろうとする決意として現れる。次に、〈女性意識〉は、女性である故のさまざまな抑圧、例えば、社会の側からの、男性に仕える職業選択の強制、結婚の結果としての子育てと家事という閉ざされた世界の強制などへの反抗である。彼女は結婚とは「洗脳」による「全体主義的国家」のなかの「奴隷」状態を意味すると考えている。

I also remembered Buddy Willard saying in a sinister, knowing way that after I had children I would feel differently, I wouldn't want to write poems

Estherにとっては、このような父権社会の価値観を代表する母親像は乗り越えねばならない第一の〈壁〉である。まずは、父権的価値観を父親と共同で体現する身近な〈母親〉を乗り越えて初めて、さらに大きな社会の父権的圧力に対抗できる。この両家に認められる保守的姿勢は、おそらく当時のアメリカの一般的な状況であったと思われる。Estherの父親も母親と同じ価値観を体現していたと考えられるが、早く失った為にそのことは不問に付されて、彼女の郷愁的な父親への愛情だけが残っていると考えられる。

そこで、彼女の生まれ育ったボストン郊外は次のように描かれている。

The grey, padded car roof closed over my head like the roof of a prison van, and the white, shining, identical clapboard houses with their interstices of well-groomed green proceeded past, one bar after another in a large but escape-proof cage.

I had never spent a summer in the suburbs before. (120)

彼女にとっては、ボストン郊外は、「母親のような郊外の吐息」(119)を感じさせる父権的な因習的な街であり、同じような羽目板張りの家が建ち並ぶ「逃れようのない檻 (escape-proof cage)」のような圧迫的な場所である。ボストンは母親の父権的価値観を保持する画一的で因習的な街となっているのである。彼女が自分の家の外に見る人々、Mrs OckendenやDodo Conwayなどはその封建的な価値観を体現する者たちであり、自立を目指す彼女はこのような周囲の全てから責められていると感じている。

'Well,' Jody began, 'there's this other girl who wanted to come in with us if anybody dropped out...'

'Fine. Ask her.'

The minute I hung up I knew I should have said I would come. One more morning listening to Dodo Conway's baby carriage would drive me crazy. And I made a point of never living in the same house with my mother for more than a week. (125)

Ⅱ. Estherの夢と分裂

ボストンの大学でオールAをとることで母の期待に沿い、奨学金を得ている

でもない仕事をしなければならないと考えている。

My own mother wasn't much help. My mother had taught shorthand and typing to support us ever since my father died, and *secretly she hated it and hated him for dying and leaving no money because he didn't trust life insurance salesmen*. She was always on to me to learn shorthand after college, so I'd have a practical skill as well as a college degree. 'Even the apostles were tent-makers,' she'd say. 'They had to live, just the way we do.'
(40-41) [イタリックは筆者]

母親は仕事をしているが、それは〈女性の自立〉という考えからやっている訳ではなく、母親の女性の生き方に関する考え方は当時のボストンの伝統的な考え (*Reader's Digest*に掲載されていた女性弁護士の女性論 (84) と同じ) を代表している。大学教授であった父親の死に至る病気に母親は冷たく対処し、葬儀にも子供たちは参列を許されなかったことがEstherには不満で、ここから母に対する反感と父に対する強い愛情が生まれ、これは作品の終わりまで続く。彼女にとっては、9歳までが幸福な時代であり、その後は母親の期待に沿って生きてきた (オールAをとる優等生) のである。父親がどのような価値観を持っていたかは具体的には描かれていないが、この作品の中では、父親的男性に対しては好意的な書き方がされており、父親コンプレックスが強い。また、階級的には、彼女の家庭は中流階級に属するのであろうが、父親死後は貧しい生活を送り、上流階級的な洗練された社交には疎い。彼女の家庭は豊かなアメリカの50年代において経済的には恵まれていなかったのである。

恋人 (Estherには結婚する気は全くない) Buddy Willardの父母は、Estherの父母と生活環境が同じ (父親が大学教授) であるが、母親はボストンの伝統的な父権社会の価値観を代表する。Buddyは医学生であるが、作家志望のEstherの想像力重視の価値観とは徹底的に対立している。女性の生き方に関しても、彼は、「男性とは未来へ飛び出す矢であり、女性とはその矢が飛び出す土台である」という母親の父権的価値観をそのまま受け継いだ人物である。

Now I knew Buddy would never talk to his mother as rudely as that for my sake. He was always saying how his mother said, 'What a man wants is a mate and what a woman wants is infinite security,' and 'What a man is is an arrow into the future and what a woman is is the place the arrow shoots off from,' until it made me tired. (74)

Sylvia Plath, *The Bell Jar* (1963) 論

馬 場 弘 利

I. Estherの背景

Sylvia Plathの1963年出版の*The Bell Jar*⁽¹⁾の時代背景は、第二次大戦後の経済的繁栄と米ソ冷戦構造のなかでアメリカが全体主義的傾向を強めていく1950年代である。小説の舞台は、マカーシーの〈赤狩り〉が支配的となり、統制的アメリカが生まれた時期のBoston近郊と大都市New Yorkとなっている。この作品は、ボストンのある女子大（作者が卒業したSmith Collegeがモデル）の学生Esther Greenwoodの自己確立の旅を描く教養小説であり、同じく戦後のアメリカの一少年の都市における心象風景を綴ったJ.D.Salingerの*The Catcher in the Rye* (1951) の女性版といえることができる。男性であるHoldenがストレートに社会のphonyなものへの反抗を示すことができるのに対して、Estherは女性であるために、女性であるというもう一つの大きな〈壁〉を乗り越えなければならないという苦しみがある。そこで、彼女に重くのしかかるbell jar（釣鐘状のガラス器）は、広くは「世界そのもの」(250)、つまり統制的なアメリカ社会（これは1953年のRosenberg夫妻の電気椅子処刑(1,2,105)に最も顕著に認められる）全体を象徴するのであるが、彼女の場合は、伝統的な女性としての生き方を強いるボストン近郊の道德規範という感じが強いと筆者は考える。Estherが感じる抑圧的なものは、彼女を取り囲む全てなのではあるが、その社会の広がりや充分描き込まれないのは彼女が女性であるということに原因があると思われる。

Estherの家族はドイツ系移民であり、父親はボストンの大学の教師をしていたが、彼女が9歳の時に死亡する。その後は母親が近くの共学の大学でタイプと速記を教えて生活を支えている。父親が生前、生命保険をかけることを拒否していたために貧しい生活を余儀なくされたということで、母親は好き